

特集

「話すこと・聞くこと」の学習と評価

元岐阜大学教授 安居 総子^{やすい ぶさこ}



「話す・聞く・話し合う」の学習指導において、評価が難しいのは、音声言語であるため、学習内容があとに残らないこと、そのために、音声言語を内容とした授業計画と具体化についての理解が不十分であること、加えて、その打開に怠惰であることが因としてある。

音声言語の学習指導を考える際、学習者把握（自ら考え、考えたことを音声言語に移す力のとらえ）と学習の流れの必然性を念頭に置かなければならない。「話す・聞く・話し合う」の学習指導を、大きく次の二つとしてとらえたい。

- (1) 「話す・聞く・話し合う」内容を、どのようにしてもたせるか。
- (2) 活動を通して、「話す・聞く・話し合う」ための、どのような力をつけさせるか。

それぞれについて評価の観点を挙げると、(1)に示した内容の指導では、

- ① 話題・題材・テーマの選び方
- ② 事柄・情報の充実のさせ方
- ③ 話の組み立て方

(2)の話し方の指導では、

- ① 発声・発音・声の大きさ・話す速さ・姿勢・アイコンタクト

② 話型とパブリック・スピーキング

また、聞く指導では、(1)の②とも関連して、

- ① 要約・解釈
 - ② 情報採取
- などに整理できる。

これら一つ一つをばらばらにやっても、「実の力」生きる力」には結びつかない。学習の必然があり、その流れに沿って学習することによって、「実の力」となるのである。成就感が得られ、評価され、自らを知るところまでの過程を含む学習活動であることが必要であり、「実の場」単元づくり」を成功させるためには、以下の三点を考えねばならない。

- (1) どんな学習者の集まりかを知る(興味・関心、学習の向き、人間関係など)。
- (2) 学習者を取り巻く環境条件を知る(学校の規模、学級の人数、学級数、異学年間の関係、地域の歴史や文化社会を構成する人的資源など)。
- (3) 「総合的な学習の時間」の展開と、国語科をはじめとする他教科との協同。

言うまでもなく、学習者の人数や地域の状況によってカリキュラムは変わるし、話題・テーマの選択が重要になってくる。

評価は、目標に照らして行うものであり、授業中・授業後の学習者把握が中心となる。先に述べたように、学習内容があとに残らない音声言語を評価する場合、授業中の指導者の発見・メモが決め手になる。

また、評価は、本来指導者が行うものであるが、学習

者個々に自分の力・欠点をわからせることも大切であり、ときに自己評価・相互評価を取り入れることも考えたい。大人になれば、学習者それぞれが、評価力をもっていることも必要だからである。相互評価の例を示す。

- A 話し手の、話す姿や話す内容を、同じ学習をした者が聞き、話型や述べ方、内容について評価する。
- B 話し手の、話した事柄・意見が正確に受け止められていくかどうかを、聞き手のメモや報告によって、話し手自身が評価したり、聞き手・話し手が話し合って、問題点を出したりする。

- C グループでの話し合いのとき、だれがだれを評価するか分担を決め、話し合いが終わってから、話し合い全体と個々の評価を行う。

- D 「ディベートの審判をする」という形を借りて、正、反の意見を発表してもらい、それをメモする。メモをもとに、話し手の話の組み立て方、資料の使い方、論の展開のしかたを評価する。と同時に、自分のメモが十分かどうか、聞き取れたかどうかの、聞き手側の評価もする。

生徒同士の相互評価を行うとき、人間関係をこわさないよう配慮することは、言うまでもない。